

第 25 回 番組審議会議事録概要

1. 開催日時

令和 6 年 3 月 22 日（金） 午前 10 時 30 分より

2. 開催場所

東京都港区台場 2-4-8 フジテレビ本社 会議室

3. 出席者

委員長 : 吉岡忍

委員 : 渡邊健一、池田哲雄、宮崎美紀子、砂川浩慶、笹田佳宏、長谷川晶一

株式会社サテライト・サービス

加藤浩輔、福本洋、窪田正利、永竹里早、武井俊人

株式会社スペースシャワーネットワーク

柴田洋平、福田哲兵、西村和晃

株式会社 CJ ENM JAPAN

三澤法夫、張豪俊、山川健太

4. 議題

- 1) 「僕らの Galileo Galilei～会えたね～」
スペースシャワーTV にて令和 5 年 7 月 25 日放送
- 2) 「CIX のじゃんけんぼんツアー」
Mnet にて令和 5 年 12 月 8 日放送
- 3) その他 報告事項

審議に先立って加藤社長から以下の報告があった。

- ・今年 5 月に認定期限を迎えるフジテレビ ONE スポーツ・バラエティ、フジテレビ TWO ドラマ・アニメ、フジテレビ NEXT ライブ・プレミアム、ディスカバリーチャンネル、アニマルプラネットの 5 チャンネルについて、認定更新の申請が今年 2 月に無事総務省に受理された。

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

■スペースシャワーTV

「僕らの Galileo Galilei～会えたね～」について

・コアなファンに向けて制作された作品としてふさわしいという印象。北海道の稚内のロケというと、漁師町などのさびしげな風景が描かれがちだが、流氷も明るくきれいな映像になっていて、そうした撮り方がうまいと感じた。

・傑作だと思う。彼らはヒットを飛ばすような人たちではなく、ミュージシャンの人たちから見てもすごいと思われるような「玄人受けする」バンドで、「くるり」や「キリンジ」のような音楽性一本で勝負するバンドの系譜を受け継いでいる。そうした「ミュージシャン・オブ・ミュージシャン」と、キャッチーな音楽を生み出す人たちの両方が、音楽業界の土壌を豊かにしてくれている。深い音楽性を持つ Galileo Galilei のようなバンドが、日本の音楽界の幅の広さを支えているのだ、ということがよく分かる作りになっている。

・尾崎雄貴のワンマンバンドだった Galileo Galilei で、マルチプレイヤーだった岩井郁人は、喧嘩したわけではないけど、別々に活動しようということになった。でもやっぱり新しい Galileo Galilei を始めるときに「やっぱりお前しかいない」となって、今度は新しい曲を共同制作する。彼らがなぜ一度別れ、再結成したか、その歴史を知っているファンたちにとっては、才能あふれる二人が共同で作詞作曲をしているシーンは非常に感動する場面だと思う。さらにこの二人がこの番組の監督もしていて、それだけ彼らの絆の深さを感じる。

・Galileo Galilei はアニメの主題歌にも使われていて、ずっと耳に入ってくる青春ソングといった感じで聞いていた。バンド解散～再結成というと、音楽性が違うとかで殴り合って喧嘩分れして、そのメンバーがステージ上でガッチリ握手する、みたいな再会劇を期待する。しかし、Galileo Galilei の場合はもう何もかもがストレートの青春ムービー的で、なんとなく口喧嘩して出て行った相手の曲を気にしていて、違うユニットで顔を合わせてもう一回やろうというところも昔のロックと違う。また、北海道に戻って地元出身のメンバーでバンドやろうっていうのも、東京にしがみついて何が何でも食いつないでいくという感じではないのが、今までの音楽バンドの印象とは異なっていて面白かった。

・バンドが解散して再結成するというのは、解散にショックを受けたファンの当時の気持ちがないがしろにされている感じがするので、あまり好意的にはとらえていなかったのだが、この作品はびっくりするほど面白かった。前半はツアー密着の正統派のドキュメンタリー、後半はライブ映像という構成はとても贅沢だと思う。曲作りを提案する場面が番組の16分過ぎあたりにあり、そこで「会えたね」というのをテーマにしたいという発言が視聴者に提示され、ライブ映像でメンバー紹介も見せた後に、最後にプロモーションビデオをいう形で「会えたね」という曲を見せるのは面白いと思った。復活する場面が福岡のホテルに呼ばれて…などあっさりしていて肩透かしを食らったが、それもリアルで良かった。

・「出会いと別れのドキュメンタリー」として素敵な番組という印象で視聴した。若くして栄光を勝ち得た彼らが一体どのようにふるまえば良いのか、その葛藤を垣間見ることができた。解散後もお互いを意識していて、才能を認め合っていて、離れている間は熟成の期間だった、という描かれ方が作品を味わい深く伝えていた。ファンにむけての作品ではあるが、お互いのメンバーに向けてのメッセージを込めた作品でもあるのかなと思う。

・アーティストが制作に携わる作品を撮る際に、制作者との一定の齟齬が発生するのは必須だと思うが、スペースシャワーTVはどのような調整をしているのかと疑問に思った。また劇場版として制作されたとのことだが、その狙いや、放送との違いについても知りたい。

・新しい青春ソングを歌うということ、若い世代が「今」を歌うということはいったいどうなっているのだろうと思って視聴したが、葡萄の一粒一粒はしっかりできているが、全体として何を言っているのかがわからないと感じた。また若い世代の演出なのになぜノスタルジックなのか？この作品で一貫して登場する赤い車はそのシンボルともいえるが、赤い車がおもちゃみたいに出てきて、最後にその車に乗って走っていくというノスタルジックな演出は、現代の社会状況、文化の状況をどう表しているのか、気になる。

委員からの意見に対し制作サイドから

(株式会社スペースシャワーネットワーク 柴田洋平氏)

・弊社の音楽番組を審議していただいた際には、「マニアックすぎる」などの厳しいご意見を頂戴することが多かったが、今回は大変お褒めの言葉とともに、我々制作スタッフでもたどり着かないくらい、作品への深い考察を委員の皆様からいただいた。感謝したい。

・今回の番組は Galileo Galilei とスペースシャワーTV がタッグを組み共同制作のような形で取り組んだ。弊社は Galileo Galilei のデビュー当時から、彼らのライブ収録や番組制作などを行っていて、良好な関係を築いてきた。今回の再結成の発表後に、そうした関係もあって、ニューアルバムのリリースに合わせた彼らの番組を提案したところ、メンバーの尾崎氏からも多くのアイデアをいただいた。その結果ドキュメンタリー要素と彼らからファンに向けた活動報告という側面をもつ番組になったと感じている。内容について弊社からこういう番組にしたいというより、本当に本人たちが望むような構成内容で制作した結果、いい作品になったのかと思う。

・非常にノスタルジックな演出だというご指摘があったが、彼らはオーディションで優勝してすぐにメジャーデビューした、いわばバンドとしての成熟の時間を待たずにメジャーデビューするに至ったバンド。番組では年齢的には大人になった彼らの、当時の葛藤などが表現されていると思う。

・劇場公開版を制作したのは、有料放送とは違ったかたちで、音楽ファンにこの物語を届けたいという思いからで、各地の会場でメンバーが舞台挨拶を行うなど、連続性のある展開となったと考えている。

■Mnet 「CIX のじゃんけんぽんツアー」について

・このグループのファンや、韓国のグループが好きで韓国に出かけていくようなファンには興味を掻き立てられる番組だとは思う。韓国語の勉強もしながら、実際に韓国文化に触れたという人にとっては、ハングルがたくさん出てくるという番組も違和感がないと思う。視聴者の反響はどうか、視聴対象は大学生なのか、ファミリー層なのか、などを知りたい。

・ボウリングでもバドミントンでも、ファンの人にとっては成立するのかもしれないが、彼らを知らない人間からしたら全く理解ができない作品だった。ジャンケンポンというのも日本のファン向けの演出なのだと思うが、わざわざ韓国の古民家で撮影しているのだから、日本人に韓国の文化を伝えるなどの何か一つテーマがあれば良かったのではないかな。

・彼らの素の表情を見たいというファンにとってはいいのだろうが、ジャンケンの勝敗にしても、それによりハラハラするなどの要素が全くなく、単純に彼らのスケジュールの空いている時間になんでもいいから詰め込んだ、という感じがして、ジャンケンというコンセプト自体がはまっていない。ボウリングの勝敗も番組の進行になんら関係がない。厳しい言い方をすると、制作者の志の低さとか、高さを感じない。やり方次第ではこの番組はもっと面白くできるのではないかな。負けた人には罰ゲームを与えるなど勝負の面白さを加味することで、彼らの魅力も引き立つし、対象外の視聴者も少しは楽しむことができたのではないかな。

・以前にこの審議会で議論した韓国のガールズグループの子が鎌倉を旅する番組は、日本で放送する意味があると感じたが、今回のこのコンテンツを日本の Mnet が作る意味はあるのか？ 何しろすべてが「普通」。バドミントンの腕前も普通だし、料理も日本人が知らない面白い料理が出てくるわけでもない。何かビジネス的な理由があるのではないかなと思った。

・彼らのことを知らない人も、最後まで見るとメンバーの個性がだんだんわかってくるし、自分も学生の頃こんな感じだったよなという楽しみ方ができる人もいるのでは。ただ、非常に良くないのは顔のアップがない。ボウリングでもバドミントンでも何をしてもいいけど、構えた時に見せる表情にガッとアップにすることで、すごく凛々しいと感じるとか、こんなドラマの役もできるのでは？とその姿に憑色々な妄想を膨らませるのも楽しみの一つである。そのためには表情の寄りで止まっている時間が必要。料理が上手じゃなくていい、辛いときのアップの表情が欲しい。番組の雰囲気はいいのに、とても損な演出の仕方だと思う。

・尺が長く感じたが、見ているうちにわりといい番組だなと思うようになった。蜂が出てくるところを CG で演出するシーンや、部屋の中のポスターなどのグラフィックもポップで洗練されていると思う。コアなファンのための番組ではあるが、こういったコンテンツが有料のビジネスになり、収益を生み出すのだと思った。

・彼らはダンスが非常にうまい。その一方で歌詞の内容は「頑張ればなんとかいける」みたいなもので、ダンスとの落差を感じる。彼らが人気の面で足踏みしている理由だと感じた。

・左と右の両方で同時に字幕が出るのが見づらい。グループなので、そうしないと入りきらないという部分はあるのかもしれないが、下と左右のどちらかならまだしもさすがに辛い。

委員からの意見に対し制作サイドから（株式会社 CJ ENM Japan 張豪浚氏）

・CIX はまだまだ BTS や SEVENTEEN のような人気グループではないのは事実である。弊社は日本の CIX のファンクラブを事務所と共同で運営していて、ファンの拡大のために、グローバルツアーを終えて彼らが心身を癒す期間をそのまま番組にしていこうというのが、この番組のコンセプトだった。メンバー同士の関係値など、リアルな彼らの雰囲気味わってもらい、ファンクラブに加入してくれている方たちに、Mnet が運営するデジタルプラットフォームにも関心を抱いてもらえたらという願いもあった。ただファンの裾野を広げたいという狙いばかりが先にたってしまったので、番組のクオリティにも注意しなくてはならないなと思った。

・「顔のアップが少ない」理由は、韓国の音楽番組はエンディングでメンバーの顔を何秒も超アップで映すという手法が定番としてあり、ある程度ファンは音楽番組で顔のアップに満足しているという前提で、番組はメンバー全体を俯瞰で見せようとしている。たださすがにアップが少なかったかなとは思う。

・字幕が読みづらいというのは我々も認識している。両サイドのテロップについても、今後どうやって表現すればいいのか、カット割りなども含めて検討していきたい。

■その他、事務局からフジテレビ NEXT ライブ・プレミアム、ディスカバリーチャンネル、アニマルプラネットの料金改定についての説明があった。

次回予定

・次回は 2024 年 7 月開催を予定。

・議題はフジテレビ ONE スポーツ・バラエティとディスカバリーチャンネルで放送される番組の予定

以上